

研究協力校としての取組

三条市立裏館小学校

1 研究の基本方針

- 学習指導改善調査の結果から見える課題をもとに、2年次計画で、全校体制による授業改善に取り組む。
- 研究主題の具現化を図る日常の校内研修の取組と、改善調査を受けた授業改善の取組を別々のものとするこ
とのないよう、「私の授業改善宣言」に盛り込み、一人ひとりが意図的に授業改善に取り組む。

2 研究主題

**学ぶ喜びを実感し、考えを深める授業の創造
～子どもが意欲的に学習問題をつかみ、「言語表現」を行う指導のあり方～**

3 研究主題設定の理由

(1) 昨年度の反省から

昨年度も、「学ぶ喜びを実感し、考えを深める授業の創造」を研究主題に、①子どもが追求意欲をもち、確かな考えをもつための学習課題・学習問題設定の工夫、②子どもが意欲的に「言語表現」するための手立ての工夫、③子どもが自分の考えを深めるための板書・学習のまとめ・評価の工夫の3点を研究内容として、校内研修を進めてきた。その中で、以下の4点について、成果と今後の研究の方向性を明らかにすることができた。

- ア：子どもを惹き付け、意欲を掻き立てる単元づくりや学習課題設定の工夫（鴨井実践・眞保実践他）
- イ：学習問題を子どもがつかむために、「ずれ」を明確にする教師の支援のあり方
（石井実践・藤田実践・豊田実践・金子由実践他）
- ウ：かかわり合って言語活動をする授業展開の工夫（清水実践・鴨井実践・眞保実践他）
- エ：ねらいと板書と評価の一体化（石井実践他）

しかし、以下の3点についての課題が残った。

- ① 子どもが「学習問題をつかむ」姿の具現化を図れなかったこと
- ② 意欲的な「言語表現」の姿を生み出すことができなかったこと
- ③ 「ねらい」と「評価」と「板書」の一体化が必要であること

1点目の子どもが「学習問題をつかむ」姿の具現化を図れなかったことについては、学習課題に対する共通意識や追求意欲を生み出すことはできても、子どもたちが「熱中」し、互いの考えの「ズレ」を意識して考え合う授業（＝◎「学習問題」を子どもがつかむ授業）を展開することが、ほとんどできなかった。

2点目の意欲的な「言語表現」の姿を生み出すことができなかったことについて、当校では、「言語表現」を、ただ「話す」「聞く」「書く」という言語活動を行わせるだけではなく、子ども同士の「かかわり」と、子どもたちの追求や表現に対する「主体性」を伴って言語活動に取り組む様相と考えている。しかし、まだまだ「教師の指示⇒言語活動⇒活動が終わると待つだけ」といった授業展開が多く見られた。

3点目の本時の「ねらい」と「評価」と「板書」の一体化が必要であることについては、校内での板書の記載の仕方の統一が図れなかったことも課題を生んだ一因である。しかし、本時の終末での子どもたちの具体的な姿を「ねらい」としてえがき、その姿を何で、どのように「評価」するかを明確にし、そのために必要な「板書」をどう記していくかについて、バラバラに考えられている授業が多かった。

そこで、今年度も、昨年度の研究主題を引き継ぎ、子どもが「学ぶ喜び」を実感し、その中で「考えを深める」授業の創造を図っていきたい。

(2) 教育目標の具現（グランドデザイン）から

教育目標	「かしこく つよく あたたく」
めざす学校像	「 授業 に輝く学校」
めざす子どもの姿	「自分の考えを 表現 し、 意欲的に 学習を進める子ども<知育>」
重点目標	「熱中・感動・進歩の 創造 challenge 80」
学校運営の柱	『あいさつ』『 話を聴く 』『傷つける言動はしない』を1年間、子どもに発信し続けます」

今年度の学校経営の土台であるグランドデザインには、めざす学校像として、日々の「**授業**」を大切にす姿勢がある。そして、その授業は、子どもたちが「**学ぶ喜び**」であふれる授業である。さらに、そのような授業において、めざす子どもたちの具体像として、「自分の考えを**表現**し、**意欲的に**学習を進める」姿がえがかれている。また、学校運営の柱として、「話を聴く」という、互いのかかわりの中での言語表現を大切にしている。

以上のように、子どもたちが「かしこく」なるための、明確な方針と目標、目指す姿が包括されたグランドデザインを受けて、本研究主題を設定した。

さらに、今年度も、子どもたちが授業の中で、「熱中して学習を進め、学ぶ喜びに感動し、表現力や思考力の進歩」を実感した姿として、子どもたち一人ひとりが「考えを深める」姿を追い求めていきたい。

(3) 学習指導改善調査の結果から

当校では、本調査に対して、以下のように取組を進めてきた。

- ① 夏季休業中に、実態把握・結果分析をいかして、全職員が2学期以降の「授業改善宣言」を行う。
- ② 子どもたちが主体的に「言語表現」をしなくなる学習活動や「読み取る力」を高める指導を実践する。
- ③ ①と②を受けて、研推が中心となり、実践から得られた子どもの主体的な「言語表現」を生む支援のあり方や指導法を、共通の知見としてまとめ、職員に還元していく。

①の結果分析を受けての各学年の誤答傾向の一覧は以下のようである。

4年	・ <u>問題の意味を理解できずに、条件をよく読まないで答える傾向がある。</u>問題文を読み、何を問われているのか確認しながら答える習慣を身に付けさせる必要があると感じられた。 ・ 作文をしたり、説明したりするときに、参考になる文章を使うことができていないことが分かった。<u>似ている文章や文を活用して、自分の言葉で書く力を高めていく必要がある</u>と感じられた。 ・ 書くことに対して抵抗を感じている子がいる。
5年	・ <u>問題文で問われていることを正確に読み取る力、自分の考えを分かりやすく説明する力が足りない。</u> ・ 問われていることと違うことを説明していたり、説明に必要な言葉を入れていなかったりする誤答が多かった。<u>問題文を読めておらず、問題をやり忘れる児童もいた。</u>
6年	・ <u>問題文の条件に合う形で記述できていない誤答が多かった。</u><u>使わなければならない用語を見落としたり、算数や理科の用語ではない自分だけの言葉で説明したりする解答が多く、記述形式の問題に慣れていないことが誤答の要因と考えられる。</u>特に算数では無答が大変多かった。活用型 B 問題形式の学習をする必要がある。

この結果分析から明らかになった課題は、「**ア：問題を正確に『読み取る力』が弱いこと**」、「**イ：問われた通りに『自分の言葉で書く力』が弱いこと**」の2点が、全学年に共通していることであった。

そこで、本年度は、アの課題を中心に、研究副題である「学習問題をつかむ」ことと関連させて、日々の授業改善に取り組むこととした。

4 研究仮説

日々の授業の中で、「読み取る力（１年次）」と「自分の言葉で書く力（２年次）」を育成することを常に意識しながら、子どもが学習問題をつかみ、意欲的に言語表現できる授業を行えば、子どもたちは学ぶ喜びを実感し、考えを深めることができるだろう。

5 仮説を具現化した「目指す子どもの姿」（☆は子どもの姿 ●は教師の支援 ＝ 研究内容）

☆1 学習課題を把握する

（●1 教材文や課題を正確に読み取る、共通の課題意識をもつ、課題への追求意欲を高める）



☆2 課題に対して意欲的に言語表現する

（●2 課題に対する自分の考えをもつ、自分の言葉で考えを表現する「書く・話す・伝える」）



☆3 学習問題をつかむ「どうして?」「たぶんこうなんじゃないかな。」

（●3 「ずれ」を意識することで、クラス全体で1つのことを考えたいくなる 教材から読み取る）



☆4 意欲的な言語表現による問題解決を図る

（●4 学習問題解決過程で自分の考えを表現する「書く・話す・伝える」）



☆5 考えを深める（●5 板書を見て、今日の学習の「まとめ」と「ふり返し」をする）

6 研究内容

上記の●1～5を受けて、今年度の裏館小学校校内研究の研究内容を以下の4点とする。

① 子どもたちが、追求意欲をもち、共通意識をもつための学習課題設定の工夫

ア：いかにして「共通課題意識」を生むか

イ：いかにして課題解決に向けた「追求意欲の喚起」を図るか

「学習課題」とは教師からの投げかけにより、子どもたちが1時間の授業の中で考え、活動すべき内容を明確に示したものである。従って、子どもたちに内在的・自発的な学習の動機はないと言える。

そのため、本時の学習課題に対して、いかに子どもたち全員が共通の「課題意識」をもち、その課題解決に向けての「追求意欲」を喚起させるかが重要となる。教師による、どのような「学習課題設定の工夫」によって、子どもたちが、学習課題に対して追求意欲を高め、確かな考えをもつことができるのかを、昨年度にも増して、様々な角度から明らかにしていきたい。

また、今年度より、日々の授業において、本時の学習課題を以下の3点について共通に指導し、「見える化」を行うことで、学年学級の隔たりなく、全校体制で学習課題へ共通意識を育むようにする。

①学習課題を、板書では**赤の□（四角）で囲むこと**とする。

②課題の言葉はできる限り「～か?」といった**疑問形で書くこと**とする。（又は「～しよう」の呼びかけ型）

③子どもたちのノートにも、本時の課題を赤で囲んで書くこととする。

② 子どもたちが、互いの「ずれ」を意識し、熱中して考え合うための学習問題成立の工夫

ウ：いかにして子ども同士 or 子ども個人に内在する「ずれ」（＝対立点）を見とるか

エ：いかにして子ども同士 or 子ども個人が「ずれ」を明確に意識できるように指導するか

「学習問題」とは、子どもたちに内在的に、自発的に生まれてくる「問い」を、学級全体のものとして位置づけ、その解決に学級全体が向かう姿勢をもった時、成立するものである。（＝この状態を「学習問題をつかむ」と言うこととする。）これは、授業の導入時から成立していることもあるが、授業の展開とともに、教師と子どもが一体となって生み出していくものであると考える。そのためには、1つの課題や話題、さらには友達や教材の考えを巡って、一人ひとりが自分の考えをもち、その考え同士の「ズレ」を意識し

なくてはならない。そこで、教師がいかにより子ども同士の「ずれ」を見とり、それを板書や問い返しなどの手立てにより、子ども同士が明確に意識できるようするかが重要となる。さらには、学習問題をつかんだ子どもたちには、高い追求意欲をもつ姿も求められる。今年度も「子どもが学習問題をつかんだ」授業の具現化を図りたい。そこで、今年度より、学習問題を子どもがつかみ、授業中に成立させた時に以下のように板書することで、学習問題として子どもたちに明示することとする。

①「問い」の言葉に「（二重丸と呼ぶ）」を赤で記して付け、白い□（四角）で囲む

②子どもたちのノートにも、◎を赤でかき、問いの言葉を鉛筆で□（四角）に囲むこととする。

③ 子どもたちが、意欲的に言語表現するため手だての工夫

オ：いかにして「表現意欲」を喚起させるか

カ：「適切な言語表現」活動とはどのようなものか

授業の学習課題を把握し、自分の「考え」や「やり方」を確かにもった子どもたちは、その考えなどを誰かに伝え、表現したくなる。また、学習問題をつかんだ子どもたちは、必ずその問題解決に向けた自分なりの解釈（予想）を表出したり、解決方法を考え出したりしていくことであろう。

そして、「自分を理解してもらいたい」「この考えでいいか確かめたい」「友達の考え・やり方を確かめたい」という意欲が生まれてくるに違いない。まさに、子どもが主体的に「言語表現」を行う瞬間である。

しかし、単に「言語活動」をさせればよいのではない。子どもの表現意欲を喚起できていない言語活動では、決して意欲的に学習を進める姿を生み出すことはできない。無論、「学ぶ喜び」ももてるはずもない。

そこで、子どもが意欲的に言語表現するために、オ：いかにして「表現意欲」を喚起させるかについて、手立てを講じて、授業の中の子どもたちの姿で検証していく。

ただ、言語表現活動は、必ずしも活動前から意欲を喚起した状態で取り組めるものとは限らない。その表現活動に取り組む中で、自然と活動そのものを楽しんだり、自他の良さや違いを捉え、その活動自体の価値に気付いたりすることができる場合も多くある。そこで、カ：子どもが活動自体にやりがいや楽しさを感じたりすることができるための「適切な言語表現」活動とはどのようなものかについても、手立てを講じて、授業の中の子どもたちの事実で検証していきたい。

④ 子どもたちが、自分の考えを深めるための「ねらい」と「評価」と「板書」の一体化の工夫

キ：どのような「評価」の工夫をすれば、具体的な子どもの姿で「ねらい」を達成できるか

ク：どのような構造的な「板書」が、「ねらい」を達成するために有効か

授業の中で「自分の考えを深めた」姿とは一体何か？

それは、子どもたち一人ひとりが、授業のねらいを達成した姿であると言えよう。授業の前と後では、ほんのわずかであっても、確実に子どもたちに「違い」が生まれていなければならない。従って、同じ本時のねらいの記述でも、具体的な姿は、子ども一人ひとりみんな違うはずである。しかし、現実には、一人ひとりの違いは十分に認識した上で、クラスの誰もが達成してほしい基準としてのカットラインを決めたり、この子が達成できれば、概ねクラス全体が達成できたと捉える規準として抽出児を設けたりして評価する。

つまり、授業の中での「ねらい」と「子どもの具体的な姿での評価」は表裏一体のものである。

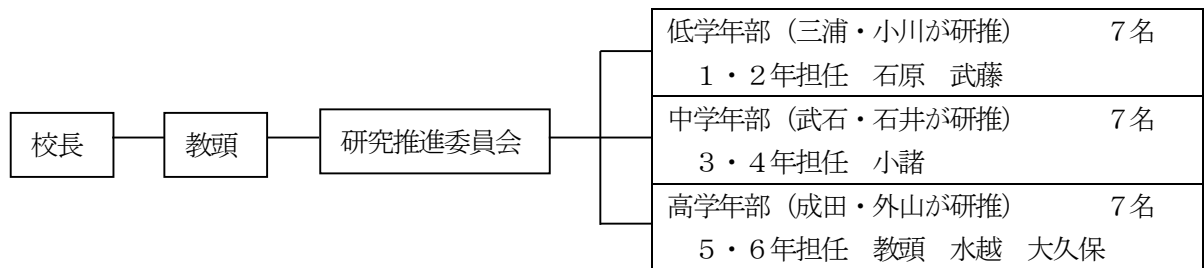
そのために、ねらいがあいまいでは授業にならないため、目の前の子どもの具体的な姿でねらいを定めなくてはならない。しかし、仮に、ねらいがごく一般的な表記（4観点）であったとしても、その評価規準が「**あの子（＝抽出児）の、こんな姿**」でなくてはならない。この授業の終末の「評価」を、いかにクラスの子どもの実態に合わせた形で工夫するかを、授業公開を通して検証していきたい。

また、子どもたち一人ひとりの具体的な姿を思い描くには、単なる「感想を書く」だけのような授業のまとめであってはならない。学習のまとめの活動は、授業のねらいや学習課題（問題）に正対していなければならない。そこで、1時間の授業では、確実に学習課題（学習問題）に正対した形で、学習のまとめについて、以下の3点を共通に指導していく。

- ①学習のまとめを、板書では青の□（四角）で囲むこととする。
- ②まとめの文章には、文頭に㊦（「まとめ」の頭文字の意）を書くこととし、学習課題（学習問題）に正対した形で書くこととする。
- 例：「今日は○○について学習し、△△ということが分かりました。その中で、□□のことが◎として話し合われ、★★という考えが出されました。私は、この★★という考えには少し疑問があり、◆◆ではないかとも考えています。そのため、次の時間には、実際にインタビューするという方法で確かめてみたいです。」
- ③子どもたちのノートにも、本時のまとめを青で囲んで書くこととする。

7 研究方法

(1) 研究推進組織



(2) 授業推進

①学年部研究推進を基本とする

- *全教諭・講師が、年1回以上の授業公開を行う。その際の授業記録・写真撮影は、各学年部で担当する。
⇒この際の指導案は細案 授業公開2日前までに全員に配布（形式は別紙①参照）
- *学年部全ての授業を参観するのではなく、学年部で参観し合う授業を相談し、自習を少なくする。
- *指導案の検討会は開かない。指導案作成における相談・助言は各学年研推・研究主任が行う。
- *協議会は原則行うこととするが、実施できない際には、授業参観者は、必ず「授業参観メモ」を記入し、授業者に渡す。（参観メモは、各学年部研推が、公開当日までに用意し、参観者に渡す）

②全職員が参観する全体研修は、以下のA～Cの3回。

- A 5月29日（金）校内研究全体会に伴う全体研公開授業（3－3社会：武石）**
⇒3－3の授業を全員で参観。協議会も全員で行う。（5月29日15:15～）
⇒協議会の前に、校内研究全体会を実施し、今年度の研究の方向性を確認する。
- B 6月26日（金）中学校区訪問における公開授業（2－1算数：小川）**
⇒2－1の授業を全員で参観。協議会も全員で行う。（6月26日15:10～）
- C 11月24日（火）初任者研修にける公開授業（4－2算数：漆原）**
⇒全員で参観。協議会は初任者で行う。全員が参観メモを漆原先生に寄せる。

③研究教科・領域等は自由。ただし、研究主題との関連で、①どのような「学習問題」を子どもとともに作りあげるか（又は、どのように課題意識を共有化したり、課題追求意欲を喚起したりするか）、②どのような「言語表現」を求め、それがねらいとどうつながっているかを明らかにした授業を構成する。

8 取組の実際

(1) 読み取る力を育成する実践（6年2組国語科「心に語りかけてくる宮沢作品 魅力を紹介します！『やまなし』」）

①単元の目標

宮沢作品を比べて読む活動を通して、登場人物の描かれ方から作者の理想に気付き、根拠となる文章から理由を考えて解釈を深め、作品を読んで伝わってくるメッセージを魅力として紹介文にまとめることができる。（読むこと エ）

②指導の構想

ア、考えを確かにもつための学習問題設定の工夫

根拠と解釈をつなぐ理由を明確にした話し合い活動を設定する

解釈のずれが生じる発問をすることで、根拠を本文に探らせ、その理由を考えるようにする。理由に着目して考えることで「根拠は同じだけれど理由が違う」「根拠は違うけれど理由が似ている」といった児童の考えの相違点や類似点に気づき、自分の根拠とその理由の整合性を再考できるようにする。このように、理由に着目して考える児童の姿を具現する。

イ、意欲的に言語表現するための手立ての工夫

比べ読みを活かして「文章の意味を考える」活動を設定する

理由に着目して話し合う経験を積んだ児童は、根拠とその理由の整合性を追求するようになると思う。しかし、文学的な知識・経験が乏しい児童は文章の意味を見出すことが難しい。本学級児童は、自分の既有知識・経験から理由を考えることを苦手としている。そこで、主教材と副教材を比べて読む単元構成の中で、描写の度合いの強い文章の意味を考える活動を設定する。主教材の読みを副教材に転移して考えることで、既有知識・経験とつなげて理由を考えることができるようにする。

比べ読みの際は、「登場人物の描かれ方」に着目して読むことで宮沢賢治の理想に迫り、その経験を既有知識・経験として用いて理由を考える児童を具現する。

ウ、考えを深めるための授業のまとめの工夫

作品から伝わるメッセージをその魅力として紹介し合う活動を設定する

複数の作品を読み、解釈を深めたところで作品から伝わるメッセージを魅力として紹介文にまとめる。書くことで自分がどのような解釈から作品のメッセージが伝わってきたのか意識付けることができるようにする。その紹介文を学級の仲間と紹介し合う活動を通して、自分なりに捉えた作品のおもしろさを自分の言葉で語る姿を具現する。

③指導計画の概要（全15時間 本時9／15時）

- ①「やまなし」を通読し、宮沢賢治の登場人物の描かれ方や表現の工夫から作品から伝わるメッセージに迫るための学習計画を立てよう。
- ②「やまなし」の世界はどんなところだろう。
- ③クラムボンなぜ殺されたのだろうか。
- ④「5月」の情景描写の意味は何だろう。
- ⑤「トブン」と落ちてきた「やまなし」は何色だろう。
- ⑥「5月」と「12月」はどんなつながりがあるだろう。
- ⑦『イーハトーヴの夢』を読んで宮沢賢治の生き方や考え方を知り、『やまなし』という題名に込められた意味を考えよう。
- ⑧『やまなし』と『よだかの星』の登場人物の似ているところはなんだろう。
- ⑨『やまなし』と『よだかの星』の情景描写を比べて、よだかの変容は「命を奪うことに辛くなったのか」「命を奪われることに辛くなったのか」を考えよう。（本時）
- ⑩『よだかの星』の紹介文を書こう。
- ⑪他の宮沢賢治作品の登場人物の描かれ方で、似ているところはどこだろう。
- ⑫～⑭宮沢賢治作品の中から友達に紹介したい作品を選び、リーフレットを書こう。
- ⑮みんなの紹介文を読み合い、学習の振り返りを書こう。

④授業の実際と「読み取る力」の育成

比べ読みを活かして「文章の意味を考える」活動の有効性

副教材『よだかの星』を、中心人物の描かれ方と情景描写の2点を比べ読む観点として読み進める中で、主教材『やまなし』の読みを活用して、文章の意味を考える児童の姿が見られた。（授業記録下線部①③）

11:13 T 男:「もう雲が鼠色になり向こうの山焼けの火がまっ赤です。」というところの、まっ赤のイメージは血です。(…中略…) 赤は血や命のイメージがある。「まっ赤」というところから命を奪うイメージがある。①

Y 男:おれ、反対。②

T : 鼠色は?

T 男: 知りません。

T : 鼠色書いた人いない?

11:15 R 子: 鼠色は、暗いイメージなので、よだかは口に入った羽虫を食べちゃったじゃないですか。よだかはそれに悲しく思ったから、賢治は暗いイメージのある色を情景描写に使ったんじゃないかな。③



情景描写の意味を考える児童

下線部①③は、主教材『やまなし』の読みの体験を活かして、色を中心とした情景描写からよだかの心情、そして作者である宮沢賢治の意図について意味付けをしていると分析できる。T 男、R 子は文章の読み取りに苦手意識をもつ児童であるが、教材を比べて読む経験を重ねることで、作品を読む方法を理解することができたといえる。

(2) 意欲的に言語表現する実践 (2年2組算数科「めざせ プロのパティシエ! 『分数』～1を分けてみよう～」)

①単元の目標

正方形、長方形、三角形、円、テープなどの形の紙を用いて分数を作り、「折って重ねる」「切って重ねる」ことで同じ大きさになっているか検討することを通して、分数は1つのものの大きさを等しく分けていることを表している数であることを理解し、 $1/2$ 、 $1/4$ 、 $1/8$ などの簡単な分数を正しく作ったり見つけたりすることができる。

②指導の構想

ア、考えを確かにもつための学習問題設定の工夫

日常生活における「等分する」場面の想起から導入する

日常生活において、ケーキやピザ、お煎餅などを等分した経験、うまく等分できなかった経験を出し合うところから導入する。「同じ大きさに分けるプロのパティシエをめざそう」を、単元を通しためあてとし、見通しをもって学習する姿を期待する。

考えのずれを生みだす課題を設定する

分数の中には、図のように形は違うが大きさは等しい分け方がある。この特徴を生かし、折り紙を使って分数を作る中で、「本当に同じ大きさなのか」「形が違ってても分数で表してよいのか」という疑問が生まれてくることを期待する。この疑問を全員で共有し、考えを交流することを通して、考えのずれを明確にし、学習問題を設定していく。

長方形の $1/4$

イ、意欲的に言語表現するための手立ての工夫

折り紙などの具体物を用いて説明し合う場を設定する

「本当に半分?」「どうして半分と言えるの?」「どうしてぴったり重ねたの?」など問いかけながら、子どもたちの「半分」「半分の半分」「半分の半分の半分」など「等分」に対する認識の曖昧さを自覚化させ、ゆさぶっていく。子どもたちが折り紙などの折り方や切り方に着目し、仲間と説明し合う中で、「等分する」という意味を実感的に理解していく姿を期待する。

分数になっているものと分数になっていないものとの比較の場を設定する

理解を深めるためには、正しくない概念との比較を通して、認識していくことが必要である。そこで、子どもの陥りやすい間違いも積極的に取り上げて、「これも分数で表せる?」「なぜこれは分数で表すことができないの?」と問いかけていく。子どもたちが折り紙の重なり方や分けた部分の大きさなどに着目して、根拠をもって説明する姿を期待する。

ウ、考えを深めるための授業のまとめの工夫

考えの共通性に注目させ、子どもの言葉を用いてまとめとする

折り紙を使って分数を作り説明する活動の中で子どもから出てきたキーワードや用いた図を板書に残しておく。それをもとに考えの共通しているところは何か問いかけ、例えば「ピッタリ重なる」「半分の半分」など子どもたちから出てきた全員が共有できる言葉を用いて、1時間のまとめをし、板書する。

また、授業終末に振り返りを書く場を設定する。分かったことやまだはっきりしないことをもう1度振り返り、図や言葉を使ってノートに書くことで、理解を深めたり、次時のめあてをはっきりさせたりしていく姿を期待する。

③指導計画の概要（全6時間 本時2／6時）

- ①正方形型のケーキをぴったり半分に分けるにはどんな方法があるだろうか。
- ②折って重ならないけれど、できた形は半分に分けていると言えるのか。
- ③円型や三角形型でも同じ作戦が使えるだろうか。
- ④正方形型ケーキをぴったり4人分、8人分に分けよう。
- ⑤長方形を×で分けた形は、それぞれの形が違いうけれど、 $1/4$ なのかどうかははっきりさせよう。
- ⑥もっといろいろな分け方で分数を作ろう。

④授業の実際と意欲的な言語表現

型からの脱却

右に示したのは、◎（学習問題）を提示した後の子どもたちの交流の様子とその際の授業記録である。

自分から進んで友達と考えを交流し合う姿が見られた。

一般的に、語彙の少ない子どもたちには、簡単な話型を示し、継続的に指導することが大切だと考えられる。

もちろん、そのような型を示すことは大事なことではあるが、そこから抜け出すことが本当の意味での「言語活動」なのだ子どもたちの姿から教えてもらった。

語彙が少なくても、折り紙を指さしたり、手振り身振りを使ったり、自分の考えを違う言葉で他の友達が言い換えたり付け足したりして言葉を交わす中で、イメージを共有し、友達との考えのずれを自覚していった。

活発な言語活動には、「自分の考えを伝えたい」「友達はどう考えているのか聞きたい」という交流することへの積極的な気持ちがあることは大前提ではあるが、「折り紙という具体物を用いた視覚的な支援」「折るという簡単な操作活動」「自分の考えを聞いてくれる仲間がいるという人間関係づくり」が有効な手立てであった。そして、何より、子どもたちが本気で考え合える◎（学習問題）を、子どもたちがつかんがことによって、このような意欲的な言語表現を行う姿が見られたと言える。



- C1 半分に見えるけどなあ。
- C2 半分じゃないよ。だって、白いところが見えるもん。
- C3 白いところ？
- C4 はみ出てなければ半分だけど、はみ出てるからなあ。
- C5 角と角を合わせなければ半分と言えないもん。
- C3 白いところを折り返せばいいんじゃないかな。
- C2 え？でも半分じゃないよ。だってそれ変じゃん。…

（3）日々の授業における実践

読	* 日常的な音読活動の取り入れ（全学年）
み	* 大切な言葉やキーワードにアンダーラインや印を付ける指導の継続化（中・高学年）
取	* 子どもと共に学級文庫の本の選定を行い、様々なジャンルの本に触れる活動（中学年）

る 力 の 育 成	*教材文における5W1Hを読み取る指導の日常化（全学年） *「図書館の時間」の積極的確保や教師による読み聞かせの継続化（低学年） *心情曲線、写真や図と言葉をつなぐワークシートなどを活用し、心情や情景描写に対する読み取りを深める学習活動の設定（中・高学年） *デジタル教科書や書画カメラなどのICTを活かし、視覚に訴えながら読み取る授業（低・中学年）
意 欲 的 な 言 語 表 現	*「好きなもののクイズ」や「ことばあそびうた」など、子どもたちに自由度があり、かつ、自分が関わりやすいものを取り入れた学習活動の設定（低学年） *課題に対する「解」「解の導き方」を班で話し合い、発表し合う中で、新たに生じる疑問について、納得のいく説明を行うグループ活動の設定（中学年） *相手意識をもって話したり、目的意識をもって聞いたりする学習場面の工夫（高学年） *自分の考えを書く時間の確実な確保と、友達との関わりの中でその考えを伝え合う姿の称賛と共有化の徹底（全学年） *自由な発想で、自分なりの表現をすることに価値を置いた単元構成の工夫（高学年）

（4）授業以外における実践

①読み取る力の育成のために … Web 配信問題をいかした取組

当校では、Web 配信問題に対する取組を、1ヶ月（4週）のスパンで、全学年が共通の姿勢で取り組めるような体制作りを行っている。

この中で、特に、毎月の2週目を中心に行う「Web 問題解説」に力を入れ、どんな読み取り方だと誤答を招いてしまうのか、どのキーワードに注目すればいいのかなど、より実践的・具体的な取り立て指導を継続化している。

②意欲的な言語表現の具現化のために … 各種集会での取組

当校では、生活指導朝会（なかよし朝会）と若草集会（児童会主催の集会）、音楽朝会を毎月行っている。

この三者において、様々な形で言語表現場面が豊かに行われている。

例えば、なかよし朝会では、毎月の生活目標について、職員による劇や替え歌などでの分かりやすい表現活動が行われ、子どもたちが生活目標の具体を理解する上での一助となっている。

さらに、この職員劇などが、各種委員会による全校への伝達活動に、様々な工夫を加える姿勢を育み、子どもたちによる劇や発表形態の工夫が多様化したことから、毎回、全校児童に好評となっている。

また、音楽朝会でも、合唱や合奏による表現に加えて、ダンスなどの身体表現や台詞の混じった音楽劇のような発表が行われるなど、表現活動そのものを楽しむ姿が多く見られた。

（5）職員研修における実践

①Web 配信問題の日々の授業への活用

夏の職員研修で、各学年の国語・算数についての Web 配信問題の過去の傾向を分析し、サポート問題を中心とした「意図的に指導場面に留意する学習内容」を事前に抑える形でのシートを作成した。

そして、そのシートを教師用指導書や教師用教科書に挟んでおくことで、事後的な確認としての運用になりがちな Web 配信問題を「事前」に活用し、「読み取る力」や「意欲的な言語表現」「学習問題」などの校内研のテーマを具現化する場面の検討に活かすようにしてきた。

②「私の授業改善宣言」

中越教育事務所の「授業改善のポイント」を受けて、当校では、昨年度から「私の授業改善宣言」を、全教職員が行うようにしてきた。この宣言の中で、自分の受け持つクラスの子どもたちの姿を思い浮かべ、その姿と、教師自身の課題とをタイアップさせながら、自分自身が今年改善したい授業のポイントを明記した。多くの先生方が「意欲的な言語表現」や「学習問題の成立」に関わる内容で、自身の授業改善の姿を具体的に描き、日々の実践に取り組む上での出発点としている。また、「読み取る力の育成」についての具体策も記載し、全校で共有化することで、教職員同士が参考にしやすくなった。

9 終わりに

年度途中ではあるが、1月で全公開授業研を終了した。

今後は、次年度へ向け、これらの授業研を中心に、今年度の校内研究の成果と課題を明確にしていく。

ただ、2年次の計画であるように、これまでの研究の積み重ねや1つ1つの授業には、自信をもって学ぶべき点が多く、的確な方向性をもっていると言える。

特に、「読み取る力」と「自分の言葉で書く力」が、当校児童の明確な課題として浮き彫りになった以上、この2つの課題解決に対して、全校体制で真摯に取り組むことは必然であり、来年度以降も、ただ「書く力」を高める取り組みだけをすればいいというものではない。

今年度の成果と課題を受け、更なる「読み取る力の育成」を図るとともに、「書く力の育成」への手立てを講じていく必要がある。

また、学習問題についても、多くの授業研では、まだ「教師からの課題提示」で終わってしまっている授業が多い。せめて、その課題提示においても、子どもたちの関心を高めたり、子どもたちに必然性をもたせたり、共通の課題意識をもたせたりする手だての工夫が、より一層求められる。

2年生の授業研から明らかになった以下の授業像を手掛かりに、子どもたちが、互いの考えのずれに気付き、本音で問い合い、語り合い、解決し合う授業の具現化を、今後も全校体制で取り組んでいく。

